

G T 関東研修大会 IN 東京

2017.11.10 後編

第39号 2017年11月27日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

G T 関東研修大会

2017年11月10日、G T 関東研修大会が東京都杉並区の芳澍女学院
情報国際専門学校 セレニティホールにて開催されました。

G T 関東研修大会は、GT 埼玉、GT 神奈川、GT 北関東、GT 東京の
地域持ち回りで研修会を年に一度実施しており、今年度はGT 東京が
担当し標記の研修を企画致しました。

<ねらい>

保育をめぐる世の中の情勢はめまぐるしく変化しています。この時勢
の中で私たちの理念を深めながら、保育園内外に向けて保育のあるべき形
を発信していくことは容易なことではありません。この研修では5名
の著名な先生から本質へのアプローチを学びたいと思います。

<日時>平成29年11月10日(金) 13:00~18:30

<場所>芳澍女学院情報国際専門学校 セレニティホール

<定員>170名

<内容>

保育所保育指針の改定 せいがの森子ども園園長 倉掛 秀人氏

書類改革、児童表 誠美保育園園長 折井 誠司氏

せいがチャンネル 新宿せいが子ども園職員 安藤 佳広氏

情緒的利用可能性 東京大学教授 遠藤 利彦氏

まとめ 新宿せいが子ども園園長 藤森 平司氏



第6回G T 関東研修大会

本号では、「まとめ」についての講演録をお送りします。

また、本誌前号(第38号)では、「保育所保育指針の改訂」について、
見守る保育の事例を用いて、せいがの森子ども園の倉掛園長より
解説を行って頂いた講演録を掲載しています。



せいがチャンネル



情緒的利用可能性について

セミナーを終えて思うこと

GT 関東大会は今回 6 回目を迎え、北は宮城県、南は沖縄県から、総勢 130 名を超える先生方が研修会に参加されました。

5 つのプログラム 5 時間みっちり研修を受講し、講演の中で藤森先生は、「私たちは現場で日々保育をする中で、どういう保育をしてもらうか。非認知力は大事だけど、どういう保育をしたら非認知力が身につくのか。しかし、それをどういう保育だったら、そういう力がついていくかがない。それを私は提案したい。」と仰られていました。

保育所保育指針の解説からはじまり、園での書類や保護者へ発信の具体的な方法。そして、最新の知見からの考え方と学んでいく中で、「はて、私は学んだことをどう活かしていこうか」と思うのです。

レポートにして配信していることも一つの取り組みではあるのですが、前回メールマガジンの中で、G I F という動く画像をお送りしました。

配信という形の中で、どうしたら読者の皆様に興味を持って頂けるか、そんなことを考えながら新たな取り組みをはじめました。

動く画像がもし、先生方の中で保護者の方に今日の子どもたちの様子として伝える何かのヒントとなってくれたらいいなと思い、私自身も色々模索中です。

次回配信予定の古民家『聴福庵』レポートでは、タイムラプスという機能を使いました。実は新宿せいが子ども園の成長展で、子どもが積み木をする様子を撮影していた動画のことを思い出しました。「学ぶことは、真似ること」と藤森先生は話をされ、早速そこから始めてみています。

(報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢)

●過去のバックナンバー

第 36 号

築 120 年古民家『聴福庵』⑧

第 37 号

築 120 年古民家『聴福庵』⑨

第 38 号

GT 関東研修大会前編

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2 号館 10 階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、
QR コードからお願いします。

—はじめに—

今、色々な話があったが多分私が来年シンガポールで講演をしてほしい内容は、遠藤先生の話だと思う。何故かという情緒的利用可能性を見守るといふ言い方で感じている。日本の人たちは「見守る」といういろいろな言い方をするが、情緒的利用可能性だと思って、海外の人は聞いてくれている。かつてのボウルビーの子どもに対して、敏感に感じ取ってやろうとかを求めている。それが保育として構築されているものがなかったので、声がかかったと思う。韓国でもそうだったと思う。韓国から声を掛けられたときに「何で私？」と思った。次第にいろいろな話を聞くと、次の課題がそこに来ている。例えば、昨日ある区議会議員が私の園に来た。私が4, 5年前区議会で講演をしたことがある。それを聞いた議員が「あなたの話した内容が、指針の内容にしても文章にしても言ったとおりに来て来た。あなたが全部関わっているかのように言ったようになってきた。現実がそうになって来たから、次の時代どうなっていくかを勉強に来た」と言われた。世田谷の本の話をする、私が関わっているのではないかと見守るといふ言葉も出ていますし、黒子になるとか、影となって応援するとかが出ていますので、私が関わっているのではないかとよく言われる。指針にしても、随分関わっているのではないかと、と言われるがそんなことはない。何故かという、先に言っているだけだと思う。きっとそうなるであろうと私が思ったことを、先に言っただけ。

—これからの課題—

大事なものは、一つは遠藤先生が指針の話をして最新の知見で分かっていることだけれど、私たちの課題は保育をどうするかということ。私たちは現場で日々保育をする中で、どういう保育をしてもらうか。非認知力は大事だけれど、どういう保育をしたら非認知力が身につくのか。しかし、それをどうする保育だったら、そういう力がついていくかがない。それを私は提案したい。特別なことを言っているわけではなくて、研究・知見を読んだ中で、保育に落とし込めたらどうなるかを提案している。研究者を呼んで納得して伝えても、明日からの保育がない。指針も解説を読んでも、文言の深みはあっても、自分の園の保育に移すには力がある。韓国でもそういうことがあった。今話したことは韓国でも勉強している。又り課程の中で保育は提案されている。領域を作って選択する保育をするようにと書かれ、各領域をこう作りなさい、と書かれているが、どんな子どもの姿があって、どういう関わりかが書かれていないので息詰まる。ごっこ・ゾーンを用意する。

「先生が遊びましょう、これをしましょう」では変わらない。そこをどうしていくかが私たちの課題。集団的感性が大事だと言われてもどういう場面か分からない、私はこの間、韓国である動画を見せた。子どもの自発性・主体性を促すために動画の中で、職員がしている方法を見せた。1歳のおやつ場面だったが、その日のおやつがジャム付きのパンが出たが、先生が子どもたち一人ずつに目の前で二つ見せて、ジャムがついているのと、ついていないのどっちがいい？と子ども選んでいる。そうすると子どもは1歳から自分で決める。そうすると次に何が起きるか。残菜を捨てる場面、ほとんど残していない。何故なら自分で選んでいるから。動画では多くの子どもたちは麦茶を残していた。それを見て、「調理に何で麦茶にするの？大人は味がついている方がいいと思うが、子どもは麦茶を残しているので水にする？麦茶にする？と選ばしたらどうか」という話をした。子どもの姿からどういう保育をしていくかが私たち。そこを研究者は言わ

ない。保育の中でどう実現していくかを言わない。そういうことをしていかないと現場の職員は困る。園長が理屈だけ、聞いて来ても、現場はどうしたらいいのというのが分かりにくい。私はG Tは色々な知見から、どういう保育をすればいいかを提案をしていく。私たちが提案することがだんだんスタンダードになってくる。指針で発達のところで、子どもは自ら働きかけてということは納得するが、どんなことをして実現するかは、子どもが自ら働きかけられるような環境がないといけない。そのためにゾーンやコーナーが思いつく。次第にそれがスタンダード化してきている。韓国でもそう。

—NEXTキーワード①—

今話している遠藤先生の話のキーワードは次の環境。ゾーンやコーナーの次に職員集団のチーム保育について。最近の研究、最後に色々な先生が複数の先生の関わりが足し算になるのか。影響しているのがチーム保育をして、リーダーをしていくことで、色々なタイプの先生を体験していくことを実現しようとしたのがチーム保育。色々な知見を読んだ中で、保育の中でしたらどうかを提案している。私としては、次の私の課題を見たときに、ずっと強調していることで、子ども同士の関わり、人との関わりの中で育つ。関わりをとくにトマセロという人が表している。3ヶ月革命と9ヶ月革命ということが言われている。赤ちゃんが生まれて3ヶ月で自己認識していると言われている。自己を知りはじめるのが、3ヶ月。9ヶ月革命は、他者認識を始めるのが9ヶ月だと言われている。私は生きていく上で必要だったからと思っている。1つが他者認識を9ヶ月で必要だったかということ、人間の進化でいうと赤ちゃんが8ヶ月になると、お母さんの膝からおろされて次の子を妊娠するのが8ヶ月、9ヶ月だから、この頃に他者認識を始めるのだろうと思う。同時に、お母さんだけの愛着だけでなく、他者に移るので当然我慢することも増えるので、エモーショナルコントロールが伸び始める。質の高い保育は、この頃になると他者を意識する方法。チーム保育等も、現場ではいろいろな知見が一つになってくる。赤ちゃんから子ども同士の関わりをしていくべきだと思っている。9ヶ月ということは離乳後、ほとんど保育園に入っている0歳は過ぎていると思う。育休を取るお母さんが多いから、いつでも抱っこというのは愛着形成ができていないことなので、抱っこすることではなく、一人で過ごせるように愛着形成を作ってあげること。色々な人と愛着形成をすると優先順位をつけるのでそれが次の課題です。

—NEXTキーワード②—

世界では、スタンダードではないのが異年齢児保育。起きている知見から考えていることだから、次第にスタンダードになるだろうと思っている。そのために整理していると5つくらい理由が分かって来た。何で異年齢児保育をするか分かって来た。これから広げるために知ってほしいことだが、異年齢児保育を反対する一番の理由は何かと思うか、それは、子どもは年齢によって発達が違うので、発達が違う子を保育をするのは無理がある。年齢によって発達が違うから、年齢ごとにすべきという考えが強い。異年齢を考え出した関係はそこ。発達が違うので、同じことをするのは無理だろうということから異年齢を考えた。日本の言う異年齢は年度別保育で、1年の幅がある子たちに同じことをさせている。一体どこに合わせているのだろうと思う。9月生まれに合わせると4月生まれには簡単すぎるし、2月生まれでは、難しすぎる。発達は連続性、順序性をもって発達する。発達過程がおおむね何歳という順序ならいいが、何歳と書くと、到達目標みたいでおかしいと思っていたのが、今回の指針ではなくなって、卒園するまでこう向かうということが書かれた。私たちは何歳で何かというより、卒園するまで発達の連続性と順序性を考えると、年度別はおかしいだろうとなる。今の日本の年度別の方の心配の方が大きい。最近、早産児が多い。年度に分けてしまうと、その子たちに無理が起きる。

発達に沿ってしてあげるのが基本。小学校のように到達目標が決められ、出来るようにするのであればそれでいいが、発達はそうはいかない。3歳以上は見えにくい、0歳をやっている私たちは分かる。0歳児クラスの子たちは4月で1歳になる。走り回ってくる子、これから生まれてくる0歳と一緒に散歩に連れて行くのが年度別保育。そうではなくてというのが1つ目。2つ目。課題保育の場合、発達に合わせてやることだが、少子社会での家庭の問題。年度別で保育園、幼稚園を分けて保育すると小学校、中学、高校大学とずっと年度別で行くと、最近の子たちは昔と違うので地域で遊ぶときも同じ学年としか遊ばない。昔は異年齢で遊んでいたが、今は学年でしか遊ばない。赤ちゃんの泣き声を聞く子どもがない。昔は兄弟が多いと赤ちゃんの泣き声を聞くことがあったが、聞いたことがないと騒音に聞こえる。これも文化で日本だけ虫の鳴き声がいい声に聞こえるが、外国では騒音に聞こえる。今は赤ちゃんの泣き声が騒音に聞こえている。赤ちゃんの泣き声が聞こえない街になっている。就職すると突然、異年齢の人が並ぶ。そうすると若い人は、年を取った人とどんな会話をしているかわからない、注意されるとめげてしまう。おとなしい子だと思ったら大間違い。会議が終わると同期で群れてワイワイする。どうも違いがわからない。せめて私たちの時期は、違う年齢の6年の幅をさせてあげること異年齢の意味がある。3つ目はお楽しみ会がある。個人差があるが、劇の中で個人差は受け止められるので年長は年長だけで行う。セリフの多さや大道具とか年度で分かれるが、園長さんの練習は3,4歳の中でやる。そうすると4歳の子が劇をテープサートで行うので、練習を見ていると来年になったらあれをしようと真似をして劇を始める。それが実は子どもの文化の伝承。見てまねること、そしてその研究は真似ることを人間は特殊な真似方をする。意味のあることも、ないこともマネするのが人間と言われている。目的だけ真似すればいいとか、全部ではなく、自分で考えた方がいいというが、人間はまず意味のないことも真似をする。その中で取捨選択するのが文化の伝承と言われている。文化は必要なことだけを真似していても伝承されないそう。子どもは意味のないこと、年長が変なことを真似する。違う年齢を見ること、見られることそれが重要。それから教えることと教わること。教えることは知識を定着することに意味がある。その関係を持つことが重要。4つ目は、一時期アメリカで黒人を撃ってしまう白人がいたが、黒人が胸に手を入れるとピストルを出すと思ってしまう。「ここで物がなくなった誰が取ったと思う？」と聞くと多くは黒人という。黒人に聞いても黒人と答えるそう。それは小学校の時は白人、黒人と分けてしまうとそういうことになると言われている、私の学校では、技術・家庭という教科があった。男子が技術で女子が家庭科。まず女子は家庭科として料理や裁縫に行きます。男子は木工や園芸へ行くと、そういう人は女性は家で料理をすればいいと刷り込みを持ってしまう。別々にすると差別意識を持ってしまうからやめよう。障害児を別にしないで、支援が必要なところだけしようとしている。別々にすると障害児として分けてしまう。その子がどこが支援をすればいいかいいのに、別にするのはやめようと言われている。日本では、年齢で分けてしまうので年齢で分けることがある。失敗をすると若いからいけないと言われる。しかし、急に明日から歳をとらせるというのはできない。歳をとるとみんないい人になると言う、そんなことはない。未熟だから経験がないからと言われるなら分かるが、年齢別でやっていることで差別意識を持ってしまう。3,4,5歳で将棋が流行っている。次第に将棋が強い子を選ぶようになる。将棋の強さは年齢ではなく、個人差なのだと思うようになると、本当の多様性が育っていく。もう一つ、7月に載っていたが教育新聞のコラムに面白いことが書かれていた。4つ目の理由でもあり、反対する人の理由でもある。そのコラムにはイジメを根絶しよう動きがある。イジメが多いが根絶する方法があって、社会学の教授は、イジメは集団で学習するから起きるから、学習は個別にすればなくなる。家庭で勉強すればなくなる、と提案している。しかし、そんなことはありえない。それに対して進化人類学者は、イジメをなくす方法は、異年齢で授業をすることと提案している、異学年交流はイジメがなくなっていると研究がされている。同じ年齢だと、同一化を目指し

てしまう。異年齢の中だとそうはならない。薩摩の郷中教育が例に出ていたが、子ども同士の教え合いがコラムに出ていた。異年齢で育つ中で新たに必要ではないかとあった。異年齢をすると、上の子がイジメをしないかと言われるが、同じ学年の方が多い。どう考えても異年齢ということが必要になってくると思う。

—NEXTキーワード③—

色々な知見を考えて、現場の仲でどう実現していけるか、次の課題は子ども同士の関係を9か月以降からどう保障していくか。うちの園で途中入所して来た赤ちゃんがいる。その子たちは当然泣きます。以前は先生が抱いていたが、赤ちゃんは泣き止まない。先生よりお母さんの方がいいからだが、今年は泣かなくなった。抱っこしてあやすのではなく、「園にはほかの子がいるよ、こんな風に遊んでいるよ」としたら泣かなくなった。別の楽しみが園にはある。これを情緒的利用可能性だと思った。大人があやしてもお母さんの方がいいに決まっているが、お母さんに勝てるのは他の子がいるということ。ほかの赤ちゃんも入りたての赤ちゃんに、0歳の子が「いない、いないばー」をする。これが保育園の特徴であり必要。お母さんの代わりをしていたら、いつまでもお母さんがいいになってしまう。監査で育休をとらせるとしているが、3歳まで家にいたら危ないと思う。働いているかどうかに関係ない。授乳期まではお母さん。それ以降は子ども集団が必要だと思っている。これを現場で構築していくことが存在意義で教育内容。子ども同士の赤ちゃんの関わり方、異年齢の関わり方が時代の提案。私たちがしていることは特殊なことではなく、自分の園だけが人気のある保育をすることではなく、子どもにとって必要なものを現場から提案していくことだと思っている。それぞれの実践の中から考えていきたい。今日も一日ありがとうございました。

本稿は、2017年11月10日に行われたG T 関東研修大会の講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)